

II 「倫・社」における発表形式の授業について

— 倫理・社会の授業研究 その2 —

田 中 裕 巳

1. はじめに

「倫・社」を担当して1年目の私の実感は、どうすれば生徒の「直感」を授業に生かすことができるのだろうか、ということであった。〈その1〉(前号)に報告したように、「現代と人間」の領域を扱った前期の発表形式の授業に発揮された生徒たちの熱意は、「人生観・世界観」の領域に入って講義中心の授業に移行するとともに冴み出し、「自分の思想は自分のものだ。注入はされない。」「思想なんかなくなつて生きられる。」といった態度の授業への傍観者を作り出し、ついに彼らの前期にしめされた「熱意」の掘り起しには成功しなかった。あの「熱意」は自己への注視とそれを通しての社会認識への芽ばえであったはずで、その内的な深化を講義中心の授業の中で充分活かしきれなかったことへの反省をこめて「生徒の「直観」をどう生かすか」という表題を報告〈その1〉に与えたのであった。

「倫・社」の実践の2年目(昭和49年度)、私は、最初の2カ月間と、各単元のまとめと一部の例外(発表者の欠席とか、発表者のつかなかつた重要な教材部分)を除いては、講義形式を差し控え、発表形式で押し通してみた。この報告〈その2〉は、2年間の発表形式の授業の部分を中心とした実践のアウトラインとその反省である。

2. 発表形式の授業の方法と問題点

ひと口に発表形式の授業といっても、個人発表、グループ発表、パネル・ディスカッションなどが考えられるが、¹⁾48年度の場合は、1クラス(45~46人)を10~11のグループに分け、発表は原則として各グループから1名が出て1授業時間内で行なうこと、ただし、グループ内の討論を4時間ほど発表前に保証する、49年度の場合は、クラスの全員が1つのテーマ又は思想家を受けもち、原則としてレジュメを用意して発表を行なうという形式であった。

【48年度の発表テーマ】

- A組—「生きがい」「幸福」「自我」「青春」「職業」
「学校」「進歩」「自由」「遊び」「愛」
B組—「生きがい」「幸福」「自我」「青春」「職業」
「学校」「遊び」「成功」「家」「疎外」

- C組—「生きがい」「幸福」「自我」「青春」「職業」
「成功」「家」「疎外」「世代」「技術」「共同体」

「生きがい」や「職業」の中で必ず議論になったのは、職業における生きがい感の喪失、生きがい観の性差、年代差ということであり、このあたりのマトメの段階から、ルターの観業命召観(Beruf)、労働の疎外、分業による全体感の喪失といったマルクス主義や実存主義への伏線をはっていたのだが、討論にしめされた熱意を思想史学習に活かしきることができなかった。この年度の発表形式の授業の中で感じたことは、少人数になるとお互いにホンネを出しあうことが比較的スムーズになるということであった。〈その1〉に引用した生徒の「人が何をどのように考えているのか」とは興味深いことである。倫社の授業は、それを知るための一手段の授業のようであるような気がする。しかし、その意見を知るのに、45人が一丸となっていればよいが、バラバラ、絶対にしらけてくる。」という意見は、お互いのホンネ(内面)を出し合うことが授業という場ではいかに難しいかを物語っていたが、4~5人の各グループごとの討論には、グループが機械的に決められたものであったにもかかわらず、サロンの雰囲気があった。教師1人で10~11のグループの討論の内容を掌握するというのは非常に困難であったが(各グループの記録係に討論内容をその都度、提出させていた)、4時間にわたるグループ毎の討論は相互理解の機会となったばかりでなく、各グループの発表に深みを与えていた。そういう意味でも、後期の「人生観・世界観」の分野でも、グループ討論を試みてみるべきであった。

【49年度の発表テーマ】

- 各クラス共通—「生きがい」「機械と人間」「公害」
「新中間層」「ビューロークラシイ」「情報化社会」
「娯楽」「家族」「学校」「職業」「世代」
「主体性」「ソクラテスの弁明」「饗宴」
A組—キリスト、ルター、マホメット、ルソー、J・S・ミル、カント、ヘーゲル、マルクス、レーニン、キルケゴール、ニーチェ、サルトル、ボーヴォワール、S・ヴェーユ、毛沢東、金日成、ガンジー、ロマン・ロラン、サンテクジュベリ、

ゲバラ、釈迦、孔子、孟子、親鸞 道元、日蓮、
本居宣長、福沢諭吉、内村鑑三、柳田国男

B組-キリスト、ルター、マホメット、デカルト、ル
ソー、ヘーゲル、フォイエルバッハ、マルクス、
レーニン、キルケゴール、ニーチェ、サルトル、
ボーヴォワール、S・ヴェーユ、プレヒト、ガ
ンジー、ロマン・ロラン、ゲバラ、孔子、荀子、
墨子、法然、親鸞、本居宣長、渡辺華山、福沢
諭吉、内村鑑三、大杉栄、柳田国男、北山修

C組-キリスト、ルター、デカルト、J・ロック、ル
ソー、A・スミス、カント、マルクス、レーニ
ン、キルケゴール、パスカル、ニーチェ、サル
トル、ボーヴォワール、毛沢東、金日成、ガン
ジー、ロマン・ロラン、B・ラッセル、ゲバラ、
孔子、親鸞、道元、日蓮、石田梅岩、本居宣長、
安藤昌益、佐久間象山、福沢諭吉、西田幾多郎、
柳田国男

48年度が「現代と人間」の領域に時間をかけすぎたため、思想史学習が「現代の思想」に傾斜し、他は概観するにとどまったことの反省もあって、49年度の「現代と人間」の発表授業は一学期で終ることをめざした。実際は、教育実習や行事のため、一部のクラスで9月中旬まで食い込んだが、最後の方は1時間に2人の発表という非常手段を用いつつ、なんとか「人生観・世界観」の分野も発表授業でやり終えた。一年のほとんどを発表形式の授業を通して、問題点として指摘できることは、①発表者はそれなりによく調べてくるが、代表的な著作を1冊でも読み終えていれば良い方で、訳者などの「解説」でお茶をにごす者が多い、②したがって、発表者以外の生徒の出来ることは、レジュメのプリントの語句の説明を求める位いで、その思想家の現代的意義を把握するには程遠く、内在的理解は不十分に終わってしまう、③したがって、多くの生徒にとっては、「思想の勉強とは何の役に立つのでしょうか？我々が今、勉強しても今後利用するような機会があるのでしょうか？」(生徒の「授業の記録」より)といった「倫・社」の存在理由を問うような疑問を抱かざるをえなくなる、ということである。

『ソクラテスの弁明』『饗宴』は、どちらかを読むことが夏休みの全員の課題であったので、5の「思想の歩み」における発表授業で述べるように、討論そのものはかなり活発になる。他に冬休みの課題としての『実践論・矛盾論』(A組、C組)、『学問のすすめ』(B組)を読んだ後での毛沢東、福沢諭吉のところでも同様の現象がみられた。a 思想史をある程度、全体的にフォローするという要求と、b 思想家の内在的な理解(少なくとも原典にあたり、思想史における位置づけや状況とのかかわり方の中に一人の人間の生き方

の軌跡を見出そうとする)をめざすという2つの要求を同時に満たすということは、2単位の「倫・社」の中ではかなり困難である。しかし夏休みと冬休みといった生徒が比較的、読書の時間を多くとれる時を利用すれば、そこに思想史学習のヤマを設定できるように思う。

3. 「現代と人間」における発表授業

① 「幸福」(48年6月、H2C)

この年はグループによる発表で、このグループは、アランの「幸福論」²⁾からの抜粋と三木清の「幸福について」³⁾からの抜粋を書いた2枚のプリントを用意した。以下はそのうちの主なものである。

<アランの「幸福論」より>

・われわれにとっては「外とう」くらいにしか関心をひかないような幸福がある。遺産を相続することが、宝クジに当るといふ幸福がそのような幸福である。名声もまた同様の幸福である。というのはそれは偶然の出会いによるものだからだ。だがわれわれ自身の力で得た幸福は、それとは逆にわれわれと一体化している。われわれは羊毛が緋色で染められる以上にその幸福によって染められる。

・自分自身の内なる幸福というものは、けっして美德と相容れないものではなく、むしろ力を意味すること、美德ということばがわれわれに知らせてくれているようにそれ自体が美德なのだと思う。

・過去を悔いたり未来を案じたりするな。大切なのはこの現在の幸福だ。これにも多くの反論はあるが、現実を見つめるということでは効果的である。

<三木清の「幸福について」より>

・幸福について考えることはすでに1つの恐らく最大の不幸の兆しであると言われるかもしれない。健全な胃をもった者が胃の存在を信じないように、幸福である者は幸福について考えないと言われるであろう。しかしながら今日の人間は果して幸福であるために幸福について考えないのであるか。むしろ我々の時代は人々に幸福について考える気力をさえ失わせてしまったほど不幸なのではあるまいか。

・幸福は人格である。ひとが外とうを脱ぎずてるようにいつでも気楽にほかの幸福は脱ぎずてることのできる者が最も幸福な人である。しかし真の幸福は、彼はこれは捨て去らないし、捨てることもできない。彼の幸福は彼の生命と同じように彼自身と1つのものである。この幸福をもって彼はあらゆる困難と闘うのである。幸福を武器として闘う者のみがおいてもなお幸福である。

以上の抜粋をレポートしてから、発表者は「幸福の定義とその条件」を考えて欲しいとまとめて討論に入

る。

P₁—「不幸の重荷を考えるのは幸福な人たちのみ」（アラン）とあるが逆も可ではないか。とすれば幸福と不幸との関係はどうなるのだろうか？

P₂—幸福であってもある人から見れば不幸ではないか？

P₃—幸福というのは感覚的なものだと思う。望みの大小は各人による。

P₄—幸福など考えているヒマもないのが現代だ。

P₅—満足する者ではなく求めるものではないか。だから、客観的な立場からみるのは間違いではないか？

P₆—幸福と思っている人が幸福なのです。

P₇（発表者）—若いうちはやりたいことが沢山あるので幸福とは思わない。

P₈—幸福を求めているプロセスが幸福ということだと思う。

P₉—不幸は小さくとも大きい、全体的不幸になってしまう。

P₅—幸福について考えることがどういう意義があるのか。

以上は討論のすべてではなく、教育実習期間中であつたので私が教室の後方でメモしていたものから主なものをも復原したものである。P₅の生徒が、「客観的な立場からみるのは間違いではないか」と言っておきながら、自ら最後で、「幸福について考えることがどういう意義があるのか」と投げやりな言葉をはかざるを得なくなつて行つた原因には、討論が散漫でかみあつていないことがある。ベンサムの「最大多数の最大幸福」に対して、人間の進歩とは、「不条理な苦痛をできるだけ減らすこと」⁴⁾であるという市井三郎の提言を導入することによって、幸福というものの主観性を明確にすることも考えられる（P₂、P₉の生徒の発言が生きてくる）。しかし「〇〇について考えることがどういう意義があるのか」という問は、「〇〇について考えることは、××の意義がある」という答えを要求しているものと考えてすまずわけにはいかない。P₅の生徒の抱いたジレットサの中には、明確な答を求める性急さというよりも、むしろ、雑談にふけるか沈黙を守っている他の生徒たちへのあきらめに似た気持があつたように思う。しかし、非常に寡黙で、指名された時以外一年間一度も発言したことのないA君が〈自分の意見〉として「授業の記録」に1ページ以上にわたつて感想を記している。

「幸福というものは主観的なものであるという意見には賛成できるが、絶対的な幸や不幸はありえないと思う。授業で、受験に落ちた生徒は不幸だ、と出たが、私が考えるには、そんなことはただ運と努力が足りなかつただけで、不幸（絶対的な意味での）とはいえないと思う。やっぱり、幸、不幸は相対的な

ものだ。

もう一つ、だれでも一生不幸を感じている人はいない（もしそうなら生きておれるはずがない）ので、時間的に不幸だと思つたり幸福だと思つたりするときがあり、また現在不幸でも幸福をめざして生きるからこそ生きられるのだと思う。それに、ある面（たとえば金銭的にとか、精神的にとか）では非常に幸福だが、べつな面から考えると不幸のどん底にあるということもあり、それが時間によって、不幸の面を忘れているときはたいへん幸福だつたりするので複雑になる。〔中略〕

そう考えると、幸福論について考えることができるか否かというのが、いちおう幸不幸の判断の基準にできるかもしれない（できないかもしれない。）

最後に、きょうの授業は実にさわがしすぎたように感じた。こんなさわがしいおちつかないふんいきでしっかり討論できるだろうか。この現状に『不幸』を感じたのは私だけだろうか。考えすぎか？

このように、あの寡黙なA君が1時間の授業から実に多くのことを展開して行つたことを、次に「授業の記録」を書く番に当つた生徒以外、誰が知り得たであろうか。授業を通しての相互理解を、と言いつけてきた私には、授業の目に見える部分は、実は、事態のほんの一部しか表わしていないのだということがよく分つた。P₅の生徒が抱いたジレットサは、沈黙を守っている生徒をも含めた生徒全員の思考過程を文字として残していかない限りは解決しないように思われる。

② 「新中間層」(49年6月, H2A)

発表者は、まず(イ)新中間層の定義、(ロ)ある銀行員の場合の発表を口頭で行なう。

(イ)では、旧中間層と対比させながら、事務員、官公吏などいわゆるホワイト・カラーがこれにあたり、精神的労働に従事していることを指摘し、その特性は、ブルー・カラーに対する優越感、小所有者意識、現状に妥協しやすい、他人志向、長いものには巻かれる的であるということ。(ロ)では、銀行員の木村さんは15年前銀行に入ったが、2年前にマイ・ホームを作って寮を出た。寮に居ると競争相手を意識し、24時間会社にいるように感じたからだ。しかし、自分は養鶏場のニワトリではないかと思う。にもかかわらず、「養鶏場の中で自分のためでない卵を毎日生まされていることに倦怠したといつても、木村氏自身は暖衣飽食の生活から抜け出す勇氣はない」⁵⁾というサラリーマンの内面をえぐり出す内容であつた。

P₁—養鶏場のニワトリで満足している人はそれでよい。

P₂—現在の社会では仕方のないことだ。上方志向の人は一生懸命仕事をやっている。

P₃—新中間層についてはあまり考えたことがない。

P₄— 企業の中で歯車の一つになっている現状を打開する方法がない。満足よりもアキラメであって、満足しているようにふるまっているだけだ。

P₅— 俗にいうサラリーマンはイヤだ。主体性をなくさせられている。

P₆— 自分のやりたいことの半分くらいは我慢しなくては。アキラメがある。自分がそういう立場におかれてもアキラメるかもしれない。

P₇— ホワイト・カラーの上層なら主体性が発揮できる。

T(教生)— 労働するというのはアキラメなのか？

P₈— 社会の発展のために我慢しなければならないこともある。

P₉— 独身のうちならなにをやっても良いだろう。

T— ホワイト・カラーも実際はブルー・カラーに近い。個性のなくなるような生活はしてほしくない。アキラメだけでいいのだろうか。

この授業の感想をBさんは「授業の記録」に次のように記している。

「全体的にちょっと私にはむつかしかった。だからよけいにプリントがあればよかったです。サラリーマンの例を上げて養けい場を出したのは何となく中間層が身近に思えてよかった。

私の父もサラリーマンの一員であるが、4:30ころ家に帰ってその後の長い時間を盆栽や犬の散歩、テレビなどで過ごしている。見ていると会社へ行くのは義務みたいで、「前々から決められたことだから」というような気持がある感じ。たまに会社のことをばやくけど、つらそうでもなし楽そうでもなし。しかし、この新中間層もまた社会文明の作り上げた一種の悪い産物ではないかと強く思うのです。将来、いや現在にも公害などと並んで重要な問題ではないか、と痛切に感じるしだいであります、はい。」

どうも討論の経過よりも、授業の記録者の感想の中に、発表にふまえた認識の深化があるようだ。討論がムードに流れてしまい、ポイントがおさえられていないということなのだろう。そこに司会者としての教師の果すべき役割の難しさがある。この討論の過程においても、「アキラメ」から労働の疎外を説明し、そこから、P₇の発言にみられるような組織のハイアラーキーの持つ問題＝分業のもたらす部分人化、官僚制の問題、ファシズムの基盤の問題、渡世職人の自由さは何にあったのか etc. に討論を拡げて行くことができるはずだ。

以上、「現代と人間」の分野における発表形式の授業例を2つ検討したが、この時期は2回の教育実習期間中にぶつかり、実際の授業の過半を実習生に任せることになるという条件と、普段と違って私が自分で授業記録を詳細にとれるという条件が重なって、分析対象がいずれも教育実習生の授業ということになってしま

った。もちろん、事前の準備や発表者の発表内容の指導は私がやっているのだから、私が授業者の場合でも、ほぼ同じような授業になったであろう。従って、すべて「わがこと」として分析してみた次第である。

4. 「現代の思想」における発表授業

① サルトル (50年2月, H2B)

発表者は、①年譜、②主な著作、③実存主義とは何か(『実存主義とはヒューマンイズムか』人文書院版からの要約)、④存在と無への案内をプリント1枚にまとめて配り、その説明を中心とした発表を行なう。

③では、実存主義が首尾一貫した無神論であること、④では、pour-soi(対自)、en-soi(即自)の概念と「対自としての私は無である」という存在の無を説明している。発表は30分程度で終るのだが、意見は出ない。そこで私が、「現在は無である」ということの意味は、「人は現在においては過去のその人であらぬことによって過去を超越し、現在まだ彼があらぬところの未決定の未来存在である」⁶⁾ということ、実存は投企(Entwurf)であるということ、共同存在論⁷⁾(Mitsein)、サルトルのマルクス主義への接近などを補足する。これにも反応はない。

このままでは、一方的な講義と全く変わりがないため、サルトルは2時限目を設けて全員で『壁』(1939年)を読むことにする(ということは、私がサルトルを重視しているということであって、他の思想家の場合、ほとんどが上記のパターン、即ち、生徒の発表者が30～40分、ときには50分全部を使ってしまい、残りの時間で私が補足説明するというパターンだけで終わってしまうということである)。

『壁』は、スペイン内乱を舞台にファシスト党のおちた3人のアナキスト(?)が、明朝の銃殺という限界状況下での一夜、どのような心身の動きを示すかを描いた短編である。そこに、たとえば、「私の肉体はひとりで汗をかき、ひとりでふるえている」という所に心身論を、「自分の死体をみる」という所に想像力の問題を、ギリスの居場所が偶然に一致したところに偶然＝不合理性の問題を、壁に象徴される閉塞状況の問題を、という形で、サルトルの哲学的概念の読み込みを行なうことが許されるように思う。次のような討論が行なわれた。

P₁— 明日がある人となない人との違いがはっきりと出ている。死と生との対比が中心のテーマだ。

P₂— 死を必然的なものとして思い知らされるとき、死ぬことが自然じゃなくなっている。

P₃— 最後の劇的かつ芸術的な死から生への転換が中心のテーマだ。

P₄— 死と生との偶然の結びつきということではないか。

T-ただ一諸に死ぬということが「双生児のように似ている」状況をつくり出すというところに、偶然としての死の共有が、如何に人と人とを結びつけたかを考えてみよう。

P₅-死に直面した時の人間の心理はきつこうなるのでしょうかね。

P₆-極限状態におかれた時の人間の感情を描いている。非日常的な想像力の豊かさが大事ではないか。

P₇-「笑って笑って笑いこぼれた」という最後のところに、偶然=皮肉な笑いを感じた。

T-死を悟って初めて人間には生への執念が出てくるとも言える。

P₈-人間は偶然に踊らされているということかな。最後の笑いは、本当のことを言えば死に、ウソを言えば助かるという、その矛盾を表わしている。

P₉-壁は生と死との境であると同時に、壁と偶然との結びつきが気になった。

P₁₀-途中で結末が分ってしまう感じで、何にも感じなかった。

P₁₁-主人公の潜在意識にはやはりエゴイズムがあったのではないか。それを表面的に隠しながら出来るだけ自分の助かる可能性のある場所を必然的にしゃべったのではないか。そんな風にも読める。

小説の読み方としては全く邪道ではないかと承知しながら、最初に「この小説の中心のテーマは何だろう?」とおさえておいて⁸⁾お互いに討論をさせると、以上のように活発な討論が展開された。発表者の発表と私の補足だけでは単なる用語にとどまっていたであろうサルトルの実存主義の概念が、このような討論を経てある程度、感覚的に理解されていったのではなからうか。しかし、それにしても『壁』を全員で読む作業は少なくとも40分位を必要とした訳で、発表授業が、単に「生徒という名の教師による講義」に墮さぬようにするためには、生徒の発表を活かすための共通の基盤作りがいかに大事かを思い知らされる。それは、教師の講義についてももちろん言えることで、生徒の側からの質問や意見を豊富に引き出しながら授業をすすめて行こうとしたら、とくに思想史学習のところでは、全員による原典読みの段階が不可欠である。そこで、教師は、a 思想史をある程度、全体的にフォローするという要求（それは、単に学習指導要領からの要請というだけでなく、思想の相対的な視点を獲得して行くためには絶対必要である）と、b 思想家の内面的な理解（P.15参照）をめざすという要求を同時に満たしたいというディレンマにまたもや追い込まれるのである。

以上、『壁』という共通の作品を全員で読んだために比較的討論が活発化し、生徒たちが自分の言葉で一人の思想家にせまろうとし始めた「現代の思想」における発表授業の一例をみた。「現代と人間」における発表授業が比較的に自己の日常の体験や経験から考え語ることができることを示していたのに対して、思想史学習における発表授業は、学習内容が抽象的になればなるだけ発表者と教師とのやりとり、発表者以外の生徒たちはそれをただ聞いているだけという状態で終わってしまう危険性をもっている。このような状態の突破口は、すでに何度か示唆したように、「進度」をある程度たな上げにしても全員共通の広場を作ろうとする努力であろう。

本報告は、さらに<5.「思想の歩み」における発表授業①プラトン、②福沢諭吉、6.まとめ>と続く予定であるが、すでに紙幅がつかってしまった。今までに述べた問題点を克服する課題をもった本年度（3年目）の実践をふまえて、以下の展開を次の機会に行ないたい。

〔注〕①梶哲夫他『中等社会科教育の研究< I >総論』

3. 社会科学習の諸形態、P43。なお、高校『倫・社』における発表授業の実践記録としては稲田六郎（水戸一高）『実践現代青年論』（鳩の森書房'72.9）があるが、自ら<学生紛争の「安全ブレーキ」>（P.245）と言うように、どうも生活指導への傾きが強い。

② Alain: Propos sur le bonheur（宗左近訳『幸福論』現代教養文庫'89 幸福は美徳である）P. 266）

③三木清「人生論ノート」（『三木清全集』第一巻、岩波書店）PP.204～212。

④市井三郎『歴史における進歩とは何か』（岩波新書）。同『思想の冒険』（筑摩書房）P. 47

⑤佐藤忠男『岐路に立つ職業人』（東洋経済）IV. サラリーマンP.72～94 この本はいろいろな職業人の意識構造をかなり適確にえぐり出している。

⑥モリス・克蘭ストン『サルトルの世界—絶望の裏側のいのち』（清水弘文堂）P. 95

⑦市倉宏祐「サルトルの集団論をめぐって」『講座哲学3. 人間の哲学』（東大出版）参照

⑧このクラスでは、中心のテーマを「死」としたものが26名、「偶然」6名、「革命」3名、「D.K」10名であった。他のクラスからは、「時間」、「想像力」などの意見も少数であるが出た。